

消 息

八巻和彦先生のご退職にあたって

八巻和彦先生は、1967年に早稲田大学第一文学部に入学し、71年西洋哲学専攻を卒業する。日本中が注目した東大安田講堂事件が1969年のことであるから、学生運動真っただ中で、大学生活を送ったことになる。卒業論文に取り上げたのは、今日に到るまで研究を続けてこられた15世紀のドイツの哲学者・枢機卿ニコラウス・クザーヌスの『可能現実存在』という難解な著作である。指導教授は、仁戸田六三郎（1907-81年）という名物教授だった。クザーヌスとの出会いについては、ニコラウス・クザーヌス『神を観ることに』（八巻和彦訳、岩波文庫、2001年）の解説に詳しく記されているので（267-271頁）、屋上屋を架すことはすまい。なお『可能現実存在』は、日本におけるクザーヌス研究の先駆者であり、八巻先生が最も尊敬する研究者の一人である大出哲（2015年歿）との共訳によって、1987年に国文社から出版された。

卒業後、八巻先生は、そのまま早稲田大学の大学院に残ることはせず、東京教育大学（現筑波大学）の大学院に進学する。当時、早稲田にはクザーヌスの研究を指導できる教員がいなかったからだ。教育大の修士論文で取り扱ったのが、同じくクザーヌスの『推測について』という著作の認識論である。周知のとおり、八巻先生の字は決して読みやすくない。修士論文を清書したのが、「運命の女神」奥様の和子さんである。奥様から直接伺ったことだから間違いはない。いつの間にか結婚もしていたのだ。

博士課程に進学してから二年後の1976年に、和歌山大学助手の職が決まり、77年には講師、80年には助教授となり、1990年まで同大学に勤務する。この間、1986年から88年まで、フンボルト財団の研究奨学生としてトリーア大学附属クザーヌス研究所に留学し、クザーヌス研究の泰斗ドルフ・ハウプスト教授のもとでクザーヌス研究に専心する。また、この留学において八巻先生はドイツ、アメリカ、ポルトガルなどのクザーヌス研究者たちとの密接な関係を築く。彼らの協力を得て、2000年にはクザーヌス国際会議「境界に立つクザーヌス」が早稲田大学で開催され、その成果である *Nicholas of*

Cusa. A Medieval Thinker for the Modern Age, ed., by Kazuhiko YAMAKI, Curzon, 2002が出版されたことも記しておこう。

さて、1990年、八巻先生は、早稲田大学商学部に助教授として着任する。神沢惣一郎先生(1920-97年)の後任と聞く。これを機に居を山梨の実家に移し、週日を東京、「週末は山梨にいます」という生活になる。商学部では、哲学、倫理学などの講義をもつが、とりわけ、「生きがいの探求」は、おそらく八巻先生にしかできない授業であり、アイデンティティを模索する現代の学生にとって貴重な授業であったと思う。

1992年には教授となり、97年-98年には早稲田大学学生部副部長、2000年から2008年まで早稲田大学広報室長、そして2011年から15年には早稲田大学付属早稲田中学高等学校校長も務める。とにかく多忙な方である。

この間、1998年-2000年には在外研究でドイツのボンに滞在し、博士論文を執筆する(京都大学に提出)。修士論文で取り扱われたクザーヌスの認識論が、クザーヌスの世界像へと展開された博士論文は、『クザーヌスの世界像』創文社、2001年として出版され、日本のクザーヌス研究者にとって必読書となる。また、クザーヌスに関する日本語、ドイツ語で書かれた多数の論文がある。このうち、ドイツ語で発表された論文の大部分(24編)は、Kazuhiko YAMAKI, *Anregung und Übung. Zur Laienphilosophie des Nikolaus von Kues*, Aschendorff, 2017に収録される。八巻先生のクザーヌス研究がドイツにおいて高く評価されていることの証しである。また日本語の論文の幾つかは、『クザーヌス 生きている中世—開かれた世界と閉じた世界』ブネウマ舎、2017年に収録されている。

ところで、この『クザーヌス 生きている中世』を手にした読者は、ことによると、当惑を隠せないかもしれない。注を除く本文420頁・全14章のうち、クザーヌスを主題とした論文は4編(約100頁)だからだ。つまり、全体の三分の二以上は、科学技術(特に原発)、アイデンティティ、文明の衝突等々、現代の問題に関する論考10編(ドイツ語による講演の和訳も含む)だからである。こうした問題の多くは、八巻先生がすでに学部の学生時代から関心をもっていた問題である。前述の訳書『神を観ることについて』の解説に、学生時代を回顧した、つぎのような一文がある。「世相は騒然としていた。眼に見える形をもち数字に換算できるものだけが存在意義のあるものである、と言わんばかりの国内の風潮。それから自動的に帰結しつつあった環境の破壊と農業の破壊、そ

して文化の破壊。眼を国外に転ずれば、米国のヴェトナムで仕掛けている戦争が、現代のテクノロジーというものはいともたやすく人々の思いを蹂躪するものであることの典型例のようにして、続行されていた」(268頁)。この関心から出発し、思索を重ねてきた結果が、10編の論考となったとも言えよう。

では、本書は、クザーヌスに関する論文と現代の問題に関する論考をただ集めただけのものなのだろうか。もちろん、そうではない。上述の『クザーヌスの世界像』の第四章で、八巻先生は、クザーヌスの思考がもつ根本的な動態構造を解明し、それを二つの極(焦点)をもつ「楕円の思考」と名づける。そうしてみると、『クザーヌス 生きている中世』は、クザーヌスと現代という二つの極を往還すること、あるいはクザーヌスとの対話をとおして、積み重ねられた思索の成果ということになるだろう。ただ、本書においては、現代という一方の極が際立ち、ドイツ語による論文集においては、クザーヌスというもう一方の極が際立つのだが、これによって八巻先生の研究成果も楕円の構造をもっていることが明らかとなるのである。

筆者が八巻先生に初めてお会いしたのは、1980年11月に、早稲田大学で開催された中世哲学会の懇親会(旧大隈会館)のときだったと記憶する。私が大学院修士課程の学生、八巻先生は和歌山大学の助教授であった。それから三七年の歳月が流れた。今春、八巻先生は早稲田大学を退職なさることになった。退職後は、晴耕雨読と言っておられるが、「本当かな」と私は思っている。何年か先には八巻先生監修による二巻本のクザーヌス著作集が出版されることになっている。難解な思想であることに加え、かなり癖のあるラテン語の翻訳である。大変な仕事になると思う。お体に気をつけて、研究の益々の発展をお祈りするしだいである。

主な業績

(1) 著作(単著)

『クザーヌスの世界像』創文社2001年

『クザーヌス 生きている中世』ぶねうま舎、2017年

Anregung und Übung. Zur Leienphilosophie des Nikolaus von Kues, Aschendorff, 2017年

(2) 編著

Nicholas of Cusa, A Medieval Thinker for the Modern Age, Routledge Curzon, United Kingdom, 2001年

『境界に立つクザーヌス』知泉書館, 2002年(矢内義顕と共編著)

『ジャーナリズムの〈いま〉を問う』早稲田大学出版部, 2012年(佐野, 後藤, 江川, 深川と共著)

『「今を伝える」ということ』成文堂, 2015年

『日本のジャーナリズムはどう生きているか』成文堂, 2016年

『「ポスト真実」にどう向き合うか』成文堂, 2017年

(3) 翻訳(単行本)

ニコラウス・クザーヌス著『可能現実存在』国文社, 1987年(大出哲との共訳)

ニコラウス・クザーヌス著『神を観ることについて』岩波書店, 2001年(文庫青823-1)

ハーゲマン著『キリスト教とイスラーム』知泉書館, 2003年(矢内義顕との共訳)

(4) 研究論文

研究論文としては、ドイツ語で発表されたものを含め70点以上があり、ドイツ語論文の主要なものは、上記の *Anregung und Übung* に収録されている。

ニコラウス・クザーヌスにおける認識の問題

(『哲学論叢』〔東京教育大学哲学会刊〕26, pp.54-64, 1974年10月)

ニコラウス・クザーヌスの "Idiota" 篇における 〈Idiota〉像について

(『和歌山大学教育学部紀要』(人文科学)30, pp.1-15, 1981年02月)

『可能現実存在論』の構造

(日本クザーヌス学会編『クザーヌス研究序説』〔国文社〕pp.129-165 1986年02月)

クザーヌスの *De visione Dei* における「神の住まう楽園」について

(『中世思想研究』〔中世哲学会刊〕31, pp.47-63, 1989年09月)

ニコラウス・クザーヌスと「近代」

(『クザーヌス研究』〔日本クザーヌス学会刊〕3, pp.89-118, 1996年03月)

「文明の衝突」の時代の宗教寛容論

(『宗教研究』〔日本宗教学会刊〕LXXIX-2 (345), pp.190-220, 2005年09月)

ニコラウス・クザーヌスにおける〈神の現われ〉としての「世界という書物」

(『中世哲学研究 VERITAS』〔京都大学中世哲学研究会刊〕25, pp.1-19, 2006年11月)

ニコラウス・クザーヌスの宗教寛容の思想

(藤女子大学キリスト教文化研究所編『平和の思想』〔リトン刊〕pp.99-135, 2008年03月)

〈文明の衝突〉を超える視点

(『文化論集』〔早稲田商学同攻会刊〕427, pp.91-124, 2011年03月)

クザーヌスの神秘主義

(竹下政孝・山内志朗(編)『イスラーム哲学とキリスト教中世』III (神秘哲学)〔岩波書店刊〕pp.245-272, 2012年01月)

中世末期，脱大学の知識人——ニコラウス・クザーヌスを中心にして

(上智大学中世思想研究所編『中世における制度と知』pp.191-222, 知泉書館刊, 2016年03月)

楽しむ無学者——後期クザーヌスにおける思想的革新の一局面

(『文化論集』〔早稲田商学同攻会発刊〕48・49, pp.1-22, 2016年09月)

矢内 義顕